

地域に暮らす障がい児（者）への発達支援

—コロナ禍における北海道文教大学スマイル・プロジェクトの取り組み—

鹿内 あずさ・村上 優衣・小橋 拓真・菅原 美保・笠見 康大・小塚 美由記・
白幡 亜希・佐藤 明紀

抄録：児童福祉法（2016）が改正され、在宅ケアサービス、および、学校や地域での「児の発達支援」「地域に必要な社会資源の開発」の必要が謳われている。児の児童発達支援についても障害のある子ども本人やその家族に対しての支援ガイドライン（厚生労働省 2017）の内容に沿った支援が必要であることが「障害児通所支援の在り方に関する検討会（厚生労働省 2021）」で示されている。本研究では、地域に暮らす障がいを有する児（者）に対する発達支援「北海道文教大学 スマイル・プロジェクト（以下、本プロジェクト）」として、2017 年から活動している。看護学・理学療法学・作業療法学・こども発達学・栄養学を学ぶ学生が本学でのイベントの開催や対象児の暮らす地域に赴き、地域に暮らす障がいを有する児（以下、対象児）との交流を通じて、学生自身が対象児の「もてる力」に気づき、学びを深めることを目的としている。2017 年度からの活動をもとに、コロナ禍における感染予防に留意し、本プロジェクトの活動を模索しながら継続してきた。本研究に同意し活動に参加した学生は、対象児の強みに着目し、コミュニケーションを楽しみ、その工夫や方法を対象児の心身の発達状況を理解するための知識の必要性について考える機会を得ていた。また、学生は、在学中に自身に必要な専門的学習に加えて、卒業後の専門領域の選択への支援の必要が示唆された。

キーワード：地域、障がい児（者）、発達支援、コロナ禍

1. はじめに

共生社会の実現に向けて、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法、2013）」が施行され、2016 年には「児童福祉法」が改正されている。この改正児童福祉法では、対象児と家族のために必要な在宅ケアサービス、および学校や地域で行う必要のある「児の発達支援」「地域に必要な社会資源の開発」が必要である（厚生労働省 2018）とされており、医療的ケア児への在宅ケアサービスと発達支援の充実を図るよう都道府県、および自治体、教育委員会等にその義務が明示されている。北海道においては、毎年「北海道小児等在宅医療連携拠点事業（Yell）」として報告会が開催されており、障がいを有する児（以下、対象児）が自宅や学校など、同じ環境で過ごすことに伴う課題がある。対象児が同年代の友人と遊び、交流する機会や多様な環境に触れる機会が少なくなると社会経験が乏しくなってしまう、年齢に応じた成長や発達が阻害されてしまう影響が生じる可能性がある（厚生労働省 2018）。自宅や学校以外に過ごす場所として、医療的ケアに対応できる看護師がいる児童発達支援、及び、放課後等デイサービスの整備が求められており（厚生労働省 2018）、障がいをもちながら在宅で生活している児童・生徒が、当たり前に行きたい学校に行くことの支援や自由に外出することへの制限を少なくし、医療・教育・福祉の連携を図りながら、在宅での生活をより充実したものにするための環境整備が必要な現状にある。

本プロジェクトでは、コロナ禍にあった2020年から2022年度までの3年間において、感染予防を図りながら、看護学・理学療法学・作業療法学・こども発達学・栄養学を学ぶ学生が大学のある恵庭市や周辺の地域に出向き、大学における企画イベントや対象児の暮らす場で関わることで、対象児の「もてる力」を高めることを目的に取り組みを継続してきた。大学の行事や授業がオンラインになり、対面で友人と会うことも叶わない状況であっても本プロジェクトで、対象児と関わりたいと希望し、活動に参加した学生の学びを報告する。

2. 目的

本プロジェクトのコロナ禍での3年間の活動と参加した学生が対象児および保護者と関わり、学生の学びから専門職を目指す意欲を高めるための今後の活動について検討することを目的とする。

3. 方法

3.1 対象者

北海道文教大学人間科学部に在籍し、研究の趣旨に同意が得られた学生である。

3.2 データ収集方法

同意を得られた学生に対して、活動後の学びの内容の考察を記述したアンケート（学びのレポート）から学生が学んだ内容をデータとした。

3.3 分析方法

実施した活動後に、以下の項目について、アンケート（学びのレポート）から得られた学生の気づきについてのデータを質的記述的に分析した。

- 1) 学生の対象児に対する捉え
- 2) 学生が対象児の「もてる力」を高めるために必要だと考えたこと
- 3) 学生が対象児および保護者との関わりを通して学んだこと

3.4 倫理的配慮

学生に対して、本研究への参加は自由意思によるものとし、研究内容（目的・方法、結果の公表）について、書面と口頭にて説明し、同意書への記載を持って同意を得た。学生の授業が無い日時に活動を行う旨を合わせて説明した。また、学生が関わる対象児とその保護者に対しては、研究者から直接、または、施設の担当職員から書面と口頭で説明し同意を得た。また、活動前には、学生教員メンバー共にボランティア保険に加入し、不慮の事故等が起きた場合の対応を行った。本研究は、北海道文教大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：30024）。

4. 結果

コロナ禍における3年間の活動概要、及び、学生の学びについて、年度ごとに示す。COVID19の感染状況を踏まえ、対面での学生の顔合わせや会議をオンラインで行うなど、感染予防を行いながら活動を行った。参加学生は延べ130名であった。

4.1 2020 年度の活動（表 1）と学び

2020 年度は、新型コロナウイルス拡大の影響で、大学自体の行事が中止となり、授業をはじめ、課外活動も制限を余儀なくされた。活動に参加できない学生に対しては、Google classroom を通じて、教員の活動について周知し、学生が活動のイメージがつくようにした。このような状況にあっても地域に暮らす障がいを持つ対象児と家族に関わる本プロジェクトへの参加に対する学生のニーズがあり、加えて、対象児や家族からの学生との交流に対するニーズがあったため、これまで関わってきた地域において、感染予防を徹底し、教員メンバーで会議を持ち、活動が実現できるよう工夫した。

表 1 2020 年度の活動概要

活動日	内 容	学 生	教 員
6 月 25 日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生 0 名のため会で話あわれた内容（コロナ禍での過ごし方）について classroom を通じて周知する	看護学科 1 名（web 参加） 作業療法学科 1 名
7 月 20 日 (月) 18:00 ～ 19:00	プロジェクト学生メンバーと教員との classroom によるオンライン顔合わせ会	作業療法学科 4 年生 1 名 こども発達学科 2 年生 1 名 健康栄養学科 3 年生 1 名 看護学科 3 年生 1 名 / 2 年生 1 名	看護学科 2 名 作業療法学科 1 名
7 月 23 日 (木・祝)	メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン 札幌支部主催 Web チャリティ・ラン・アンド・ウォーク 会場：A 市 B 地区公園	作業療法学科 4 年生 1 名 こども発達学科 2 年生 1 名 健康栄養学科 3 年生 1 名 看護学科 3 年生 1 名 / 2 年生 1 名	看護学科 1 名 作業療法学科 1 名 【制作指導：こども発達学科 1 名】
8 月 27 日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生 0 名のため会で話あわれた内容（コロナ禍での過ごし方）について classroom を通じて周知する	看護学科 1 名 作業療法学科 1 名
9 月 24 日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生 0 名のため会で話あわれた内容について classroom を通じて周知する	看護学科 1 名 作業療法学科 1 名
9 月 29 日 (火)	恵庭市こども発達支援センターとプロジェクト教員メンバーとの会議：12 月クリスマス会企画の検討	コロナ禍でのデイサービス事業の開催状況について共有する	看護学科 3 名 作業療法学科 1 名 理学療法学科 1 名 健康栄養学科 2 名
10 月 22 日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生 0 名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	看護学科 1 名 作業療法学科 1 名
11 月 5 日 (木)	プロジェクト学生と教員メンバー会議：コロナ禍での活動の工夫を図り、12 月の恵庭市こども発達支援センターデイサービス通所児を対象としたクリスマス会企画について話し合う	こども発達学科 3 年生 2 名 / 1 年生 2 名 健康栄養学科 3 年生 2 名 看護学科 3 年生 1 名 / 2 年生 1 名	看護学科 3 名 作業療法学科 1 名 理学療法学科 1 名 健康栄養学科 2 名
12 月 18 日 (金)	恵庭市こども発達支援センターデイサービス通所の児を対象としたクリスマス会準備	健康栄養学科 1 年生 1 名 作業療法学科 2 年生 2 名 / 3 年 2 名 看護学科 3 年生 1 名	看護学科 1 名 作業療法学科 1 名 こども発達学科 1 名
12 月 19 日 (土)	中止：恵庭市こども発達支援センターデイサービス通所の児を対象としたクリスマス会		
12 月 24 日 (木)	中止：介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会		
1 月 28 日 (木)	中止：介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会		
2 月 6 日 (土) 10:00 ～ 16:00	共に学び、生きる共生社会 in 北海道 主催：医療法人稲生会（オンライン開催）	こども発達学科 3 年生 1 名 健康栄養学科 3 年生 1 名 看護学科 2 年生 1 名	看護学科 2 名 作業療法学科 1 名
3 月 25 日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生 0 名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	看護学科 1 名 作業療法学科 1 名

7月23日（木・祝）チャリティ ウォークへの参加（写真1）

本プロジェクトとA市介護ママの会の協働で、チャリティ・ウォーク（障がい者の旅行支援のメイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン札幌支部）に参加した。コロナ禍でこれまでのような大規模な開催ができないため、参加者が自宅近隣などを走ったり歩いたりする様子を写真に撮影し、主催者に送ることで参加の景品が返送されるシステムであった。

A市の書店裏の公園に集合し、車椅子での移動が必要な対象児（者）4名（養護学校に通う中学生1名：脳性麻痺、養護学校に通う高校生1名：脳性麻痺、大学生1名：脳性麻痺、19歳：脊髄性筋萎縮症、気管切開・24時間人工呼吸器使用・意思伝達機器のスイッチを操作して会話）とその家族とで3Kmを歩いた。撮影記録は、健康栄養学科の学生と教員が担った。

学生は、自ら進んで車椅子を押しながら、対象児の目線に合わせて会話をしながら公園周囲の道を歩いた。人工呼吸器を積んでいるため押すのに力やコツが必要な車椅子は、対象児の体格に合わせたものであることを保護者から聞き取っていた。きょうだい児の参加もあり、学生は、対象児ときょうだい児に対しても笑顔で声かけを行っていた。学生と対象児双方がマスクを装着し、お互いの表情が確認しにくい状況でも身振り手振りでコミュニケーションをとっていた。

1) 学生の対象児に対する捉え

「病気や障がいを持っていても自分ができること、難しいことを理解して行動していると思った」「無邪気で心優しく、とにかく笑顔が輝いていた」「隣にいただけで太陽のように明るく照らしてくれる力がある」と捉えていた。

2) 学生が対象児の「もてる力」を高めるために必要だと考えたこと

「気持ちを読み取ることが難しい場合もあるが、自らコミュニケーションをとること」「小さなことでも話しかけること」「車椅子を使用している子どもたちには、しゃがんで目を合わせることを心がける」「一人ひとりが持つ障がいについての基礎知識を理解していくこと」が必要だと考えていた。

3) 学生が対象児および保護者との関わりを通して学んだこと

「専門知識がないと支えられないのではなく、一緒に楽しむことが大切」「自分から心を開くことが大切」「笑顔でコミュニケーションをとることが大事」「もっと一緒に楽しむイベントを考えていきたいと思った」「子どもたちが自分の力で未来を支えることができれば良いと考えた」との学びがあった。



写真 1 2020 年度 チャリティ・ウォークの様子

4.2 2021 年度の活動（表 2）と学び

前年度に続き、2021 年度の前半もコロナ禍の影響で学生が活動に参加することが難しかったが、google classroom を通じて新学期の学生・教員メンバーの顔合わせを行い、学生が画面越しに交流する機会を持った。また、オンライン開催の小児等在宅医療連携拠点事業での医療的ケア児と家族の支援について学ぶ機会とした。年度の後半になり、感染予防を図りながら学生との交流を希望する施設に対して、クリスマス会の企画運営、A 市の介護ママの会茶話会において、学生が対象児と保護者との交流の機会を持つことができた。

表2 2021年度の活動概要

活動日	活動内容	学生	教員
4月22日 (木)	中止：介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会		
4月30日 (金) 授業のない日	プロジェクト学生メンバーと教員との classroom によるオンライン顔合わせ会	作業療法学科2年生1名 こども発達学科3年生1名 健康栄養学科4年生1名 看護学科3年生2名	看護学科2名 作業療法学科1名
5月27日 (木)	中止：介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会		
6月24日 (木)	中止：介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会		
7月22日 (木・祝)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	看護学科1名 作業療法学科1名
8月26日 (木)	中止：介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会		
9月30日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	看護学科1名 作業療法学科1名
10月9日 (土)	つながるサロン any：介護ママの会保護者と児との交流と施設見学 会場：コルクえべつ	作業療法学科4年生1名 看護学科1年生1名 / 2年生2名	看護学科1名 作業療法学科1名
10月28日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	看護学科1年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名
11月13日 (土)	つながるサロン any：介護ママの会保護者と児との交流	作業療法学科4年生2名 看護学科1年生1名 / 2年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名
11月25日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	看護学科1名 (web) 作業療法学科1名
11月27日 (土) 13:00～16:00	第3回北海道小児等在宅医療連携拠点事業 YeLL [いえーる] 実践検討会 - みんなで考える 医療的ケア児にかかわるコーディネーターの役割 (福祉編) 主催：医療法人稲生会 (オンライン開催)	看護学科4年生1名 / 3年生1名 こども発達学科3年生1名	看護学科2名 作業療法学科1名
12月11日 (土)	つながるサロン any：クリスマスツリーを飾る会 / 介護ママの会 保護者と児との交流	看護学科1年生4名 こども発達学科3年生1名	看護学科2名 作業療法学科1名
12月18日 (土)	中止：恵庭市こども発達支援センターデイサービス通所の児を対象としたクリスマス会		

2021年12月22日(水) B市 就学前医療的ケア児 C デイサービス クリスマス会

1) 学生の対象児に対する捉え

「ペープサートを見て聴こえてくる音や音楽を楽しむことができる」「指先を動かしたり、楽器の音を楽しんだりできる」「他者との関わりを楽しむことができる」「クリスマスカードに好きなシールを選ぶことができる」「絵本を選び、読み聞かせを楽しむことができる」「発語が難しくても、手の少しの動きや顔の表情で思い(嬉しい・嫌だ・恥ずかしい・違う)を伝えることができる」存在であると捉えていた。

2) 学生が対象児の「もてる力」を高めるために必要だと考えたこと

「ツリーにかけて置ける靴下を手作りし、対象児が好きなキャラクターを中に入れて嬉しい気

持ちになってもらうこと」「クリスマスツリーの貼ってあるカードを準備し、ツリーに対象児が好きなシールと一緒に貼りながら関われる工夫「対象児が自分でシールを選べるように、シールを入れる箱を大きくて浅いものにして見やすくなるように工夫すること」「ペープサートをする際に、児が座っていても見やすいように一人ひとりの目の前まで行って、見やすい構成にすること」が必要と考えていた。

3) 学生が対象児および保護者との関わりを通して学んだこと

C デイサービスには、保護者の同席はなく、多職種（看護師・保育士・作業療法士・介護福祉士）のスタッフが対象児に関わる場に学生が参加し、「関わる児の状態に合わせて、できないことではなく、できることを考えてコミュニケーションをとること」「同じ目線になって話すること」「児の興味のある話をする」「児のジェスチャーのスピードに合わせて、ゆっくり関わること」の必要を学んでいた。



写真2 2021年度医療的ケア児デイサービスクリスマス会の準備と当日の様子

4.3 2022年度の活動（表3）と学び

2022年度に入ってから、コロナ禍であっても対面で交流する機会を持ちたいとのニーズがあり、本学でも対面での授業や演習が継続されたことから、感染予防対策を継続しながら、本プロジェクトの活動がコロナ禍前に近い方法で実施できた。これまで関わりがあったA市の介護ママの会との協働でのサロンでの学び（菅原 2023）やB市の医療的ケア児デイサービスC施設での学び（小橋 2023）に加えて、大学のある地域の介護ママの会からの交流活動の相談を受けることができた。学生は、対面で対象児と保護者との関わりと学科と学年を越えた交流が叶い、自身の進路に重ねて学ぶ機会を得ることになった。

表3 2022年度の活動概要

活動日	活動内容	学生	教員
4月9日 (土)	つながるサロン any: キャンドル作成 / 介護ママの会 保護者と児との交流	健康栄養学科4年生3名 看護学科2年生1名	看護学科2名 作業療法学科1名
4月28日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名
5月14日 (土)	つながるサロン any: ビーズアイテム作成 / 介護ママの会 保護者と児との交流	作業療法学科3年生2名 看護学科2年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名
5月26日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名
6月11日 (土)	つながるサロン any: 認知症サポーター養成講座 / 介護ママの会 保護者と児との交流	作業療法学科3年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名
6月26日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名
7月9日 (土)	つながるサロン any: ビーズでオリジナルアイテムを作ろう! / 介護ママの会 保護者と児との交流	こども発達学科4年生1名	看護学科2名 作業療法学科1名
7月28日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名
8月13日 (土)	つながるサロン any: 大麻夢太鼓といっしょに太鼓をたたいてみよう! / 介護ママの会 保護者と児との交流	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名
8月25日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名 看護学科1名
9月10日 (土)	つながるサロン any: ビーズでオリジナルアイテムを作ろう! / 介護ママの会 保護者と児との交流	健康栄養学科1年生1名 看護学科4年生1名	看護学科2名
9月22日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名 看護学科1名
10月8日 (土)	つながるサロン any: マラニック / 介護ママの会 保護者と児との交流	看護学科2年生1名	看護学科2名
10月27日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名 看護学科1名
11月9日 (水)	恵庭市肢体不自由児者親の会との会議 (賛助会員の活動協力について)	こども発達学科4年生1名	看護学科1名
11月12日 (土)	つながるサロン any: スマイル・プロジェクトの取り組みについて / アロマオイルでハンドマッサージを楽しもう! / 介護ママの会 保護者と児との交流	看護学科2年生2名 作業療法学科3年生1名	看護学科3名 作業療法学科1名
11月24日 (木)	介護ママの会茶話会 会場: 江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合われた内容について classroom を通じて周知する	作業療法学科1名 看護学科1名
11月27日 (土)	第3回北海道小児等在宅医療連携拠点事業 YeLL [いえる] 実践検討会 - みんなで考える 医療的ケア児にかかわるコーディネーターの役割 (福祉編) 主催: 医療法人稲生会 (オンライン開催)	看護学科4年生1名 / 3年生1名 こども発達学科32年生1名	看護学科2名
12月2日 (金)	恵庭市肢体不自由児者親の会「活動写真展」参加	こども発達学科4年生1名	看護学科1名

活動日	活動内容	学生	教員
12月10日 (土)	つながるサロン any：クリスマス会 ツリーオーナメント飾り / 介護ママ の会 保護者と児との交流	看護学科2年生1名 作業療法学科3年生1名 こども発達学科4年生1名（準備 参加：作業療法学科3年生1名 / こども発達学科4年生2名 / 看護 学科2年生3名	看護学科3名 作業療法学科1名
12月21日 (水)	稲生会 就学前医療的ケア児デイベ ス「どんぐりの森」クリスマス会	企画：こども発達学科4年生2名 当日参加：看護学科2年生3名 準備協力：こども発達学科3年生 1名 / 作業療法学科2年生1名 / 3 年生1名	看護学科2名 準備支援：作業療法学科 1名 / こども発達学科1 名 / 健康栄養学科2名
12月22日 (木)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	参加学生0名のため、会で話し合わ れた内容について classroom を通じ て周知する	作業療法学科1名 看護学科1名
1月14日 (土)	つながるサロン any：新年交流会 / 介護ママの会 保護者と児との交流	作業療法学科3年生1名	看護学科2名 作業療法学科1名
2月11日 (土)	つながるサロン any：お雛様 鑑賞会 / 介護ママの会 保護者と児との交流	作業療法学科3年生1名	看護学科1名 作業療法学科1名
2月23日 (木・祝)	介護ママの会茶話会 会場：江別市社会福祉協議会	看護学科3年生1名	作業療法学科1名 看護学科1名
3月11日 (土)	つながるサロン any：キャンドルを 作ろう / 介護ママの会 保護者と児 との交流	看護学科3年生1名	学位授与式にて参加なし
12月18日 (土)	中止：恵庭市こども発達支援セン ターデイサービス通所の児を対象と したクリスマス会		



写真3 2022年度 A市介護ママの会と本プロジェクトのサロンの様子

4月から再開したA市介護ママの会と本プロジェクトとの協働によるサロン（表3）

- ・4月 キャンドル作成 / 交流会
- ・5月 ビーズアイテム作成 / 交流会
- ・6月 認知症サポーター養成講座 / 交流会

- ・ 7 月 ビーズアイテム作成 / 交流会
- ・ 8 月 太鼓をたたく体験 / 交流会
- ・ 9 月 ビーズアイテム作成 / 交流会
- ・ 10 月 マラニック / 交流会
- ・ 11 月 スマイル・プロジェクトの取り組み報告とアロマオイルでのハンドマッサージ / 交流会
- ・ 12 月 クリスマス会（ツリー飾り） / 交流会
- ・ 1 月 新年交流会
- ・ 2 月 お雛様鑑賞 / 交流会
- ・ 3 月 キャンドル制作 / 交流会

学生は、授業や行事のない日の開催により、参加しやすく、毎月の活動の機会（表 3）を得ることで、対象児との関わり、保護者との関わり、関係職種（保健師・看護師・訪問看護師・介護福祉士・相談支援員・美容師、等）との関わりから各々の学びを重ねることができていた。



写真 4 2022 年度 写真展の見学

1) 学生の対象児に対する捉え

「自分の好きな色やものを選ぶことができる」「できないことは他者に頼むことができる」「製作する過程を共有することで他者と一緒に楽しむことができる」「努力して自分ができることを増やしていくことができる」「それぞれの方法で楽しさを表現できる」「興味のあることを周囲の人と共有できる」「障がいがあっても進学して学ぼうとする意欲がある」存在であると捉えていた。

2) 学生が対象児の「もてる力」を高めるために必要だと考えたこと

「個性を尊重する関わりを大事にする」「障がいがあるからできないと考えるのではなく、その児にとって出来るとはどのようなことを考えて関わること」「児ができること、できないことを見分けて必要なことをサポートする」「どのようなイメージで作りたいかを話し合って、細かい作業はサポートする」「児がゆっくりでも自分ができるような関わりをする」「過度な手伝いにならないように関わる」「相手の目線や会話のスピードに合わせて会話をする」などが必要と考えていた。

3) 学生が対象児および保護者との関わりを通して学んだこと

このサロンでは、児と保護者の誰が参加するか直前に把握することになるため、学生の多くは、対象児と会うのが楽しみと感じ、コミュニケーションを工夫することも喜びと感じていたが、一方で学生によっては「児が可愛いと感じても最初はコミュニケーションに戸惑ったが、何度か会って側に行って話すうちに緊張が少しずつ和らいで話せるようになった。」と表現していた。しかし、多くの学生は、「短い時間でその児に合った関わりができるために、児と保護者の関わりを観察して、関わり方の参考にできた」「非言語的な表現を意識して関わるようになった」「たくさんの児と接したいと思えるよ

うになった」「病気や障がいの有無にかかわらず、児と一緒に楽しめることを実感できてとても嬉しい気持ちになったことで、年齢の高い障がいを持つ方たちとも関わっていききたい」「実習以外では障がいを持つ児と関わる事がなかったため、とても貴重な機会と感じた」「対象者がどのような人なのか、本人を理解する姿勢が大切」と学びについて表現していた。

2022 年 12 月 21 日（水）B 市 就学前医療的ケア児 C デイサービス クリスマス会

前年度の企画を担当した学生をリーダーに複数の学科の学生が準備に参加した。事前準備では、児が自宅に帰ってからツリーにかけることができるよう靴下を手作りし、対象児が好きなキャラクターについて情報を得たうえで、好きなキャラクターを描いたものをラミネート加工して靴下の中に入れて、取り出すときに楽しめるようにした。また、カードにクリスマスツリーの絵を描いてシールをオーナメントとして貼ることができるように星形などのシールを準備した。折り紙でシールを入れる底の浅い箱を作成し、カードのクリスマスツリーに関わりながらシールを貼れるような工夫をした。当日は、体調不調により看護学科の学生 3 名で運営（ペープサート）することになり、緊張しつつも協力して実施することができた。約 2 年間で学んだ看護の知識をベースに学ぶことができていた。

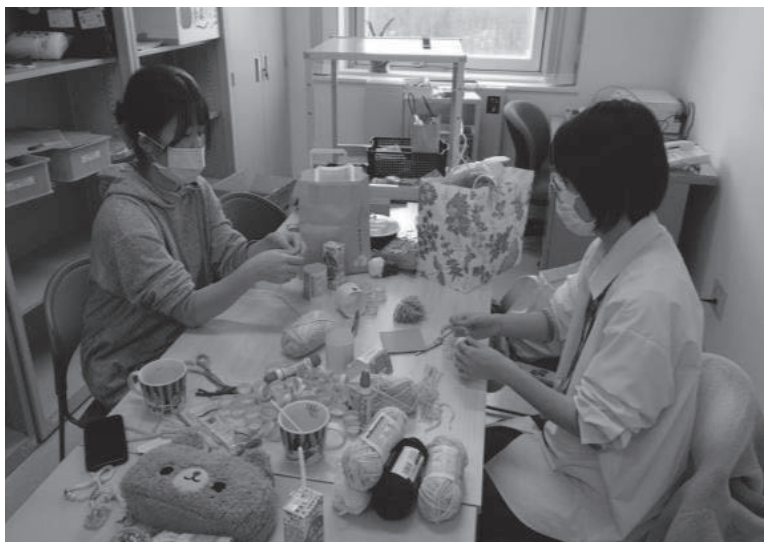


写真 5 2022 年度 医療的ケア児デイサービス クリスマス会

1) 学生の対象児に対する捉え

対象児は、男児（3歳：重症新生児仮死，5歳：ウォルクフィルシュホーン症候群，5歳：両大血管右室起始症，5歳：脊髄性筋萎縮症）4名，女児（4歳：蘇生後脳症）1名であった。

学生は、対象児に対して、「その場にいる人たちが笑うとつられて笑って、楽しそうな表情をする」「楽しい雰囲気を感じることができる」「児なりの意思表示ができる」「話せなくても表情やしぐさで一生懸命伝えようとしている」「目線や目の動き，瞬きなどで自身の気持ちや行動の意思表示ができる」「自分のできうる表現や意思をしっかりと持っている」存在と捉えていた。

2) 学生が対象児の「もてる力」を高めるために必要だと考えたこと

「小さな道具や飾り付けのシールがあるなどの選択肢を準備する」「選択肢のあるものは，自分で選んでもらう」「わかりやすい言葉を使う」「これから何をするのかを伝える」「児のペースに合わせて関わる」などが必要と考えていた。

3) 学生が対象児および保護者との関わりを通して学んだこと

C デイサービスには，保護者の同席はなく，多職種（看護師・保育士・作業療法士・介護福祉士）のスタッフが対象児に関わる場に学生が参加し，「言葉を通してのコミュニケーションが取れないため，児が何を思っているのかを把握することが難しかったが，スタッフの関わりをみて，理解しようとする姿勢が大事だと思った」「最初はコミュニケーションに戸惑いを感じていたが，児ができたことを褒めるとさらに嬉しい表情を見せてくれたため，嬉しく，もっと積極的になろうと思えた」「今後看護の実習が本格的になるため，今後の看護の際に非言語的コミュニケーションの技術を活かしていきたいと考えた」「今回の経験で自身の将来やりたい看護分野を考える機会になった」「今回の経験を自身の看護師としての姿を描くことにつながったため，自身がやりたい看護を考えていきたい」などの学びがあった。

5. 考察

学生は，対象児との関わりから疾病に対する知識に加えて，人体構造学・解剖学・生理学等の知識が対象児の身体的状態を理解するために必要であること，発達に関する知識や生活支援のための制度の理解が必要であることへの気づきがあった。また，学生は，対象児の強みに着目し，その強みを伸ばす支援を考えており，在学中に自身に必要な専門的な学習や卒業後の専門職のイメージを具体的にしていた。

5.1 コロナ禍における学生のコミュニケーション

学生は，COVID19の感染拡大により，2020年度は大学における授業がオンラインとなり，学内行事の中止が余儀なくされた中で，友人やサークルなどの仲間とも接する機会がないままに生活していた。

障がいをもつ地域に暮らす対象児と保護者は，感染リスクを恐れて対面での交流への希望はあっても外出を躊躇することになっていた（鹿内 2019）。

オンラインでの学生と教員との交流会の実施では，顔が見られるだけでも嬉しいという学生が多

かったが、何とか交流の機会を作ろうと教員メンバーで話し合いを続け、これまでに関わりのある機関にアプローチしてきた。このことは、本プロジェクトの活動が2021年度後半から感染対策に慣れてきた保護者や施設スタッフのニーズを得られることに繋がったと考える（鹿内 2023）。

学生は、活動が再開されてから、対象児との交流や学生メンバーとの交流を喜び、活動の楽しさを語った。学生は、マスクを着用して対象児とコミュニケーションをとらなければならないため、その様子は少し消極的に見受けられたが、一方で、学生は対象児の気持ちを理解するためにその表情やしぐさを観察しながら、対象児の強みを捉えようとしていた。以前のように大学の施設を活用した大人数でのイベントは困難であったが、交流や活動準備の場で学生同士の交流は学生のコミュニケーションの力を高めることに少なからず良い影響を与えたと推測される。

5.2 目指す専門職のイメージの具体化と知識の獲得

これまでの本プロジェクトの活動からは、対象児の身体面を理解するためにもっと学ぶ必要がある知識は何かについて、学生が対象児と関わることで様々な気づきを得て学習に取り組む様子が認められた。対象児の発達を促す関わりについては、共に活動する他学科の学生や上級生の様子から考察し、医療系・教育系の学科で学ぶ学生それぞれに学習意欲が高まっていた（鹿内 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 村上 2019, 2020, 山北 2019）。上級生をモデルとして自身も対象児に接するようにしたなどの声もあり、参加学生がさらに学習意欲を高めていけるようプログラム参加の機会を増やしていくことが必要と考える。

学生が持つ自身の専門職としての姿は、本プロジェクトの活動への参加が機会となり、就職先を具体的にイメージする機会となっていることが推察される。実際、障がい児（者）支援の職場や小児科病棟・NICUに就職した学生が数名おり、本プロジェクトでは学生がやりたい仕事は何かを自問し、実践したいケアを考え、就職先をイメージすることへの効果が示唆されている。

今後はプロジェクトの卒業生との交流の機会を加え、学生と卒業生の間のコミュニケーションの機会を増やしていきたい。

5.3 障がい児（者）を取り巻く社会への関心

日本における障がい児（者）を支援する社会となるには、地域（都道府県単位や各自治体）においてどのように整備されると良いのか、先駆的な活動を行っている地域の専門職と市民との活動等に実際に学生が触れることで、地域包括ケアシステムの各地域での構築について考察する機会を増やす必要があると考える。2020年度からは、COVID19の拡大に伴って、普通の生活さえも困難な現状（鹿内 2020, 鹿内ほか 2020）であったが、障がいを有する対象児たちの生活や教育、取り巻く地域の社会資源にも目を向ける活動としていきたい。

6. おわりに

学生は、対象児との交流を通じて、一人ひとりの対象児を尊重して関わることで対象児を理解するための知識の必要性について学んでいた。コロナ禍ではあったが、プログラムへの準備からの参加によって、複数の学科の学生が学年を問わずに参加交流する機会となり、他学科の学生を対象児を観察する視点について自身と比較しながら学科ごとの強みについて考え、専門職としての自身の将来の姿

をイメージする機会を得ることにつなげることができていた。学生に対する学びの効果、地域貢献を教員メンバーとの協働で本プロジェクトの活動を継続していきたい。

本研究は、北海道文教大学地域貢献事業の助成を受けて実施した。

文献

厚生労働省, 2018, 「医療的ケアが必要な子どもと家族が安心して心地よく暮らすために—医療的ケア児と家族を支えるサービスの取組紹介—」『厚生労働省政策統括官付政策評価官室 アフターサービス推進室』

厚生労働省, 2016, 「障害者の日常生活、及び、社会生活を総合的に支援するための法律、及び、児童福祉法の一部を改正する法律」

https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/kaisei/kokuji_h30.html (アクセス日: 2023 年 12 月 3 日)

厚生労働省, 2019, 「障害児支援の強化について 発達支援の概要」: 6-7.

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi (アクセス日: 2023 年 12 月 3 日)

小橋拓真・菅原美保・鹿内あずさ・笠見康大, 2023 (東京), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—看護学生の学び—」『日本子ども学会第 19 回大会』 58.

北海道小児等在宅医療推進協議会の小児等在宅医療連携拠点事業 <http://yell-hokkaido.net/> (アクセス日: 2023 年 12 月 3 日)

村上 優衣, 2019, 「小学校入学を控えて悩む保護者を支える! 医療的ケア児の学校選択の悩みと課題, それを支援する専門職の活動」『こどもと家族のケア』 13(6): 90-94.

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・白幡亜希・小塚美由記・福士晴佳・服部裕子・佐藤明紀, 2019 (東京), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—作業療法学生の学び—」『日本子ども学会第 16 回大会』 38.

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子, 2020 (札幌), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト—ミニ運動会における学生の学び—」『日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌』 10-11.

鹿内あずさ, 2018, 「在宅における児の発達支援」『こどもと家族のケア』 12(6): 14-18.

鹿内あずさ・村上優衣・小塚美由記・白幡亜希・笠見康大・服部裕子・福士晴佳・佐藤明紀, 2019 (東京), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—スマイル・プロジェクト—」『日本子ども学会第 16 回大会』 38.

鹿内あずさ, 2019, 「北海道胆振東部地震から学ぶ—災害時の対応と日頃の備え—」『こどもと家族のケア』 13(6): 27-32.

鹿内あずさ・村上優衣・服部裕子, 2020, 「医療的ケア児と保護者の暮らし—新型コロナウイルスが拡がる中で不安や戸惑い—」『こどもと家族のケア』 15(3): 91-95.

鹿内あずさ・村上優衣・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子, 2020 (札幌), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト—A 大学 5 学科の学生と教員の活動を通して—」日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌 7-8.

鹿内あずさ・村上優衣・笠見康大・白幡亜希・小塚美由記・服部裕子・佐藤明紀, 2021 (滋賀), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—発達支援事業所とのミニ運動会の取り組み—」『日本子ども学会第17回大会』6.

鹿内あずさ・村上優衣・小橋拓真・菅原美保・小塚美由記・白幡亜希・笠見康大・佐藤明紀, 2023 (札幌), 「コロナ禍における障がい児・者への発達支援活動—北海道文教大学スマイル・プロジェクトの取り組み—」『日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌』17-18.

菅原美保・小橋拓真・村上優衣・鹿内あずさ, 2023 (東京), 「地域に暮らす障がい児(者)への発達支援—イベント交流を通じた学生の学び—」『日本子ども学会第19回大会』58.

山北葵・小塚美由記・白幡亜希・鹿内あずさ, 2019 (札幌), 「障がいを持つ在宅療養児への発達支援—栄養学科学生の学び—」『日本感性工学会 北海道支部 第7回学生会』8-9.

Developmental Support for Children with Disabilities Living in the Community

—Hokkaido Bunkyo University Smile Project's efforts during the coronavirus pandemic—

SHIKANAI Azusa, Murakami Yui, KOHASHI Takuma, SUGAWARA Miho,
KASAMI Yasuhiro, KOZUKA Miyuki, SHIRAHATA Aki and SATO Akinori

Abstract: The Child Welfare Law was revised in 2016, to that it is now necessary to provide home care services for target children and their families, as well as "support for children's development" and "development of social resources necessary for the community" in schools and communities. This study aims to investigate the relationship between the students studying nursing, physical therapy, occupational therapy, child development, and nutrition at the university and children with illnesses and disabilities living in the area around the university or near the students' route to school (hereinafter referred to as "target children") from 2017 (Shikanai 2018, Shikanai 2019, Murakami 2019, Yamakita 2019, Kanouchi 2020, Shirahata 2020, Murakami 2020) . The purpose of this project was to enhance the children's awareness of their potential and to build on their own learning by engaging with them through events organized by the university and by visiting their homes. Based on our activities since 2017, we have continued to explore new activities for this project, keeping in mind infection prevention during the COVID19 pandemic. Students who agreed to this study and participated in the activities. They had the opportunity to focus on the strengths of the target children, enjoy communication, think about ways to further improve communication, and the need for knowledge to understand the child's mental and physical development. It was suggested that in addition to the specialized learning they needed while attending school, they also needed supported by choosing their specialty after graduation.

Keywords: community, children with disabilities (persons), developmental support, COVID19 pandemic